

横芝光出土 古代の器いろ色



横芝光町教育委員会

はじめに

昨年の展示では「縄文土器 1万年」を企画し、町内出土の縄文土器を網羅的に取り上げ、いかにこの地に豊かな縄文文化が開花したことを示した。今年は一転、土器は土器でも文様がほとんどない古代（古墳時代から平安時代）の器を取り上げ、一見のべらぼうの様な器にも、様々な形や色彩があることを示して、そこに人々の様々な思いがあつただろうことを考えてみたい。

横芝光町は、外洋に接していることによる温暖な環境のもとで縄文文化が発展したが、その後に続く弥生文化は早く入ったにもかかわらずあまり繁栄しなかったようで、遺跡の数は少ない。しかし、古墳時代中期になると急速に人口が増え、殿塚・姫塚に見るような古墳文化が栄えた。この古墳文化は富の集中による貧富の拡大、豪族の出現に見る権力の生成、それが伸張することによってやがて国家が形作られる時代であった。その中で人々が日常使う土器は、わずか数百年前まで使っていた文様を付けた縄文土器とは異なり、表面がのべらぼうになってしまった。なぜ、1万年もの長い間付けていた縄文を、人々はいとも簡単にかなぐり捨ててしまったのだろうか。これには土器が実用本意になったとか、合理的になったとか、様々な説が提示されているが、未だに定説はない。

しかし、古代の器をもう一度よく見てみよう。器の形は用途に応じてそれぞれ様々に形作られ、色も用途に従って彩色したり、機能的、感性的に付け加えたり、あるいは素材を選んでいたと思われる。特に色彩については文様造形が無くなった分、より多彩になって、赤や黒だけでなく、白、青、緑が増え、これがやがて中近世陶磁器へと受け継がれて行った。

これまで古代の土器の研究は、主に形（型）と製作技法とから進んできた。ここでは少し視点を変えて、機能的な形（機能美）と色彩とから古代の器を考えてみたい。

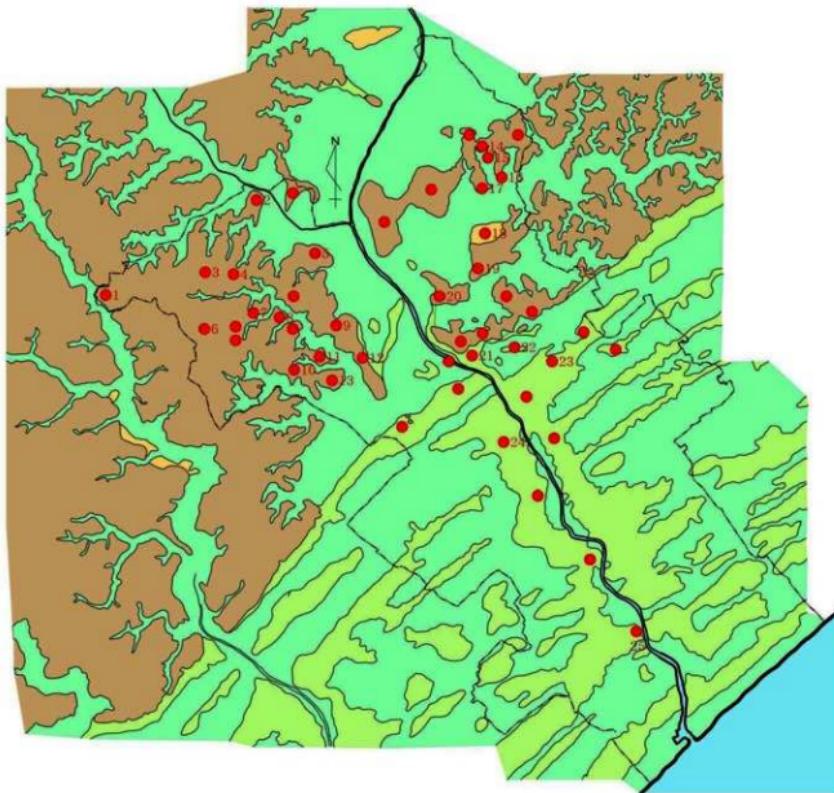
目次

はじめに

目次

1. 古代焼き物の器の形	1
① 壺形の器	2
② 蓋形の器	5
③ 坎・碗・皿・蓋形の器	11
④ 鉢形の器	14
2. 古代焼き物の器の色	15
① 赤い器	15
② 赤と黒の器	20
③ 黒い器	21
④ 青い器	24
⑤ 緑色の器	25
⑥ 白い器	28

3. 器に書かれた文字・記号	31
① 墨書き土器	31
② 繰り返しの器	38
4. その他	40
① 球	40
② 叩き目	40
③ へんな形の器	41
④ 灯芯痕のある器	41



I 中台古墳群 2 牛熊宮台遺跡(狎隈郷) 3 中台大木戸遺跡 4 石作台遺跡 5 小堤宮台遺跡
6 遠山瓜ヶ作遺跡 7 北長野山野遺跡 8 東長山野遺跡 9 振子上遺跡 10 長倉宮跡・宮ノ前遺跡
11 敦治屋台遺跡 12 寺方遺跡 13 長倉荒久台遺跡(長倉郷) 14 横本新台遺跡 15 横本城山遺跡
16 神谷山遺跡 17 八石田遺跡 18 小川台北遺跡(岩室郷) 19 小川台遺跡 20 傍傍示戸遺跡
21 芝崎遺跡 22 芝崎中島遺跡 23 三反田遺跡 24 庚申遺跡 25 星形粉豆遺跡

1. 古代焼き物の器の形

古代になると土器は、用途に応じて壺や甕・环など、定型化されたものが継続して造られるようになり、その始まりは弥生時代から平安時代まで約千年ほど続いた。それは日本に水田耕作による米作りが導入され、定着するまでのあいだであった。そしてこれは中世における陶磁器に取って代わる過程を踏みながらも、今日もその用途と形態は基本的にはほとんど変わっていない。ここにまず主なものをあげてみよう。

① 壺形の器

壺は、口がつぼまり、胴が袋状に膨らんだ形で、液体や粉状のものを入れ、持ち運びが可能で、貯蔵形態と言うものである。この形の派生として、壇、瓶、甕などがあり、今ではペットボトルが幅を利かせている



古墳時代中期の壺形土器
(寺方遺跡 器高32.7cm)

② 甕形の器

甕は口が大きく広がり、胴は袋状に膨らんだ形で、液体状のものを入れて煮沸ををする煮沸形態というものである。この派生形としては瓶が有り、今は鍋や炊飯器に取って代わっている。



古墳時代中期の甕形土器
(寺方遺跡 器高18.7cm)

③ 环・碗・皿・蓋形の器

环は、茶碗のような皿のようない形で、食べ物を盛ったり、汁物を入れた供献形態と言うものである。环にはほかに脚の付いた高(杯)环、口の立ち上がりが低い盤、立ち上がりが無い皿などがある。



古墳時代中期の环形土器
(鞍治屋台遺跡 径14.6cm)

④ 鉢形の器

鉢は時期によってあつたり無かつたりで安定しないが、これは甕と环の中間的な形であるからだろう。平安時代になると甕を代用したり、注ぎ口が付く片口鉢が出て、中世の捏鉢へと続く。



古墳時代中期の鉢形土器
(鞍治屋台遺跡 径14.5cm)

① 壺形の器

横芝光町では、弥生時代前期の壺が出土している。これは東海地方（名古屋周辺）からもたらされたもので、千葉県内でも最も古い時期に属し、関東全体で見ても古い方である。弥生後期の壺も出土しているが、この時期のものは少ない。

古墳時代になると各地に遺跡が現われ、出土数が増え、形、大きさにも多様性が出てくるだけでなく、他地域からの搬入か影響を受けたと思われるものもある。大きい壺では径30cmを超えるものから、小さいものは径10cmに満たない小さい壺一塙があり、これを載せる器台が付く。土師器の壺は古墳時代後期になると甕のようになり、これに収斂されて行ったと思われる。



弥生時代前期尾張製の壺
(水神平式、宮ノ前遺跡)



弥生時代後期の壺
(鍛冶屋台遺跡)



古墳時代中期の壺(神山谷遺跡)



古墳時代中期の壺(鍛冶屋台遺跡)

変わった形の壺では、小壺のほかに咲と呼ばれるものがある。これには器台があって、これに載せて使われたと思われ、お供え等に使われる特別な意識を持つて作られたものであろう。下右の古墳時代前期の壺は、口の部分が屈曲して垂直に立ち上がる様な形で、関東ではあまり見られるような形態ではなく、その類例は北陸地方に見られる。



古墳時代前期の咲
(神山谷遺跡 高6.0cm)



古墳時代後期の小壺
(瓜ヶ作遺跡 器高7.5cm)



古墳時代中期の壺
(神山谷遺跡 高15.0cm)



古墳時代中期の壺(鍛冶屋台遺跡)



古墳時代前期の壺(神山谷遺跡 高26.0cm)



古墳時代後期の壺(神山谷遺跡 高40.0cm)

古墳時代中期には土師器だけではなく、須恵器製の様々な形の壺が作られる。それははじめ渡来人の制作により、和泉の陶邑古窯跡群で生産されたものが、もたらされたもので、朝鮮半島の新羅土器と良く似て、青黒灰色をした硬い焼きのものである。器種の呼び名は、甌、平瓶、長頸瓶、短頸壺など、その形によって異なる。



須恵器甌(城山遺跡 高11.3cm)



須恵器小壺(神山谷遺跡 高4.7cm)



須恵器平瓶(東長山野遺跡)



須恵器長頸瓶(小川台古墳群 高23.0cm)



須恵器三足壺(芝崎中島遺跡)



赤焼須恵器短頸壺(東長山野遺跡)

② 壺形の器

弥生時代の壺には、南関東系と北関東系の2種類の土器があって、その大きな違いは文様の有無である。これは弥生文化の東方への伝播が、東海地域を伝ってきたものと、山の中（中山道・東山道）を通ってきたものの違いが影響している。それが古墳時代になると違いはなくなり、形が一様になって、古墳時代中期までほとんど変わらない。ただし、古墳時代前期の壺には、器表面には刷毛目という整形痕があるが、中期になると箝削り整形に変わる。



弥生時代後期の南関東系壺
(飯治屋台遺跡 高17.4cm)



弥生時代後期の北関東系壺
(神山谷遺跡)



古墳時代前期の壺(神山谷遺跡 高26.5cm)



古墳時代中期の壺(寺方遺跡 高15.3cm)

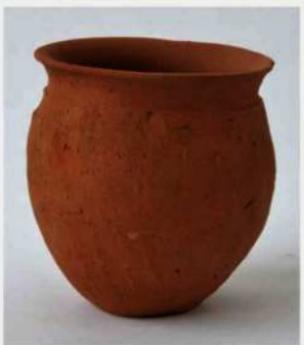
甕は古墳時代後期になると、壺との収斂もあって多少形に変化が見られ、長胴形や丸胴形、鉢形に近いものなどいろいろな形が出て来る。また、この頃になると須恵器での甕の生産が始まり、水甕に使ったと思われる大甕が多くなる。



古墳時代後期の甕(神山谷遺跡 高29.1cm)



古墳時代後期の甕
(振子上遺跡 高20.3cm)



奈良時代の甕(宮ノ前遺跡 高16.0cm)



古墳時代後期の甕(長倉宮脇遺跡 高18.8cm)



平安時代前期の甕(芝崎遺跡 高26.0cm)

奈良時代から平安時代になる頃には、壺はさらに様々な形が現われ、関東でも地方色が見られるようになる。1は色が灰色で、口が断面くの字に曲がり、胴部は叩き目整形痕が見られ、地元の土器とは全く異なる。これは長岡京で使われた壺で、千葉で出ること自体まれである。3は口が屈曲し、胴下部に篦撫で整形痕があり、胎土に石英、長石を含んでいることから茨城方面に多い常総型の壺である。4は口が斜め上に立ち上がり、胴は砲弾形で、全体に薄作りであることから東京方面に多い武藏型である。



1 長岡京の壺(芝崎遺跡)



2 下総型土師器の壺(芝崎遺跡)



3 常総型土師器の壺(芝崎遺跡 高32.5cm)



4 武藏型土師器の壺(神山谷遺跡)



5 赤焼須恵器の壺(城山遺跡)

須恵器の壺は古墳時代後期以降東海地方の窯で焼かれるようになり、やがて平安時代には各地で生産され、形もさまざまに変化する。千葉県内でも須恵器窯が各地で発見され、町内の遺跡でもいろいろな須恵器が出ている。



湖西窯製須恵器の大壺(神山谷遺跡)



猿投窯製須恵器の大壺
(宮脇遺跡 高46.2cm)



赤焼須恵器の壺(城山遺跡 高31.3cm)

甕の派生形態として瓶がある。甕と瓶との違いは、甕は底があり、瓶には底が抜けているか穴が開いていて、甕に重ねて、甕で沸かした蒸気を瓶の底から通して、瓶の中のものを蒸す器である。既に弥生時代からあるが、千葉では主に古墳時代後期から多くなり、平安時代にかけて土師器や須恵器で作られている。瓶は餅米を蒸かすのに使う用具で、祭の時などに餅をつく時の特別な器であると思われるが、町内出の出土例は多い。



古墳時代後期の瓶(神山谷遺跡 高20.5cm)



平安時代土師器の瓶(芝崎遺跡 高16.5cm)



奈良時代の瓶(宮ノ前遺跡 高26.1cm)



平安時代須恵器の瓶(宮ノ前遺跡 高30.5cm)

平安時代の壺の中には台付きがあつたり、奈良時代の器の中に外見は瓶のようであるが、底がある変な形の壺がある。瓶にも底の孔が須恵器では通常4分割で、土師器では丸抜けが多いが、中には5分割底もある。



外形は瓶であるが、底のある土師器
(芝崎遺跡)



5分割孔の瓶底 (芝崎遺跡)

③ 坯・碗・皿・蓋

坯は茶碗のような形であるが、弥生時代から古墳時代前期は高坯(杯)の方が多かった。この高杯は奈良時代まであり、奈良時代以降はこれに変わって高台付の坯が出現する。高台付は当初須恵器から始まったが、土師器にも伝わり、やがて皿や碗にも付けられ、今日のこれらの器には当たり前のようにある。



古墳時代前期の高杯
(神山谷遺跡 高12.1 径16.0cm)



古墳時代中期の高杯
(神山谷遺跡 高14.0 径17.9cm)



古墳時代後期の高杯
(瓜ヶ作遺跡 高20.2 径23.2cm)



奈良時代の高杯 (芝崎遺跡 径13.0cm)

古墳時代中期以降は脚の無い壺が主流となり、古墳時代後期以後は大量に作られ、その形は次第に変化して行く。奈良時代後半になると土師器の壺も須恵器のように輻轆で成形して作るようになり、平安時代には輻轆成形壺が主流となる。



古墳時代中期の壺(神山谷遺跡 径15.0cm)



古墳時代中期の壺(鍛冶屋台遺跡 径15.0cm)



古墳時代後期の壺(鍛冶屋台遺跡 径15.5cm)



古墳時代後期の壺(瓜ヶ作遺跡 径14.0cm)



奈良時代前期の壺(芝崎遺跡)



奈良時代後期の壺(芝崎遺跡)



平安時代前期の壺(神山谷遺跡 径12.3cm)



平安時代前期の壺(芝崎遺跡 径16.0cm)



平安時代中期の壺(神山谷遺跡 径13.5cm)



平安時代後期の壺(中島遺跡 径17.7cm)

壺の派生形態としては盤と皿、さらにそれらの付属器として蓋が取り上げられる。盤は奈良時代に入って須恵器で出現し、すぐ土師器でも作られる。奈良時代須恵器壺・盤には高台が付き、これが土師器にも受け継がれ、皿ではほとんどが高台付になる。



古墳時代後期の須恵器壺
(神山谷遺跡 径9.8cm)



奈良時代の須恵器蓋・壺(神山谷遺跡)



古墳時代後期の須恵器壺
(寺方遺跡 径12.4cm)



奈良時代前期の盤(芝崎遺跡 径21.2cm)



奈良時代後期の高台付壺
(芝崎遺跡)



平安時代前期の皿(芝崎遺跡 径14.8cm)



平安時代前期の蓋(芝崎遺跡)



平安時代中期の灰釉陶器皿(神山谷遺跡)



平安時代中期の皿(芝崎遺跡)



平安時代中期の蓋か皿(芝崎遺跡)

④ 鉢形の器

鉢は、壺より深く、甕より浅く、全体的に小振りであるが、平安時代になると用途に応じて様々な形が作られる。特に僧の托鉢用の鉄鉢や注ぎ口の付いた片口鉢などが出来る。また、中には須恵器の破片や破損したものを、捏鉢に再利用したと思われる器があり、これが中世に捏鉢となったと考えられる。



古墳時代中期の鉢
(鍛冶屋台遺跡 高9.5cm)



古墳時代後期の台付き鉢
(鍛冶屋対遺跡 高14.5cm)



古墳時代後期の鉢
(宮脇遺跡 高9.5cm)



平安時代の鉢
(神山谷遺跡 高7.5cm)



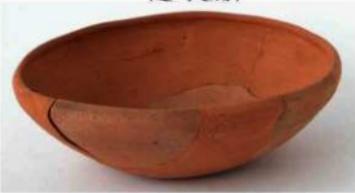
平安時代の鉢
(芝崎遺跡 径18.5cm)



平安時代の片口鉢
(芝崎遺跡)



平安時代の鉄鉢 (芝崎遺跡)



平安時代の鉄鉢 (神山谷遺跡)



須恵器破片を使った捏鉢
(芝崎遺跡)



破損須恵器を再利用した捏鉢
(城山遺跡)

2. 古代焼き物の器の色

① 赤い器

赤い土器は縄文時代からあった。すでに縄文時代前期に赤漆を土器に塗り、赤くしたり、これで文様を描いたりして装飾を現わした。弥生時代に入って、いよいよ全体に赤彩したり、図案化して文様を描いた土器が多くなった。古墳時代になると土器に赤彩することは続くが、文様を描くことはほとんど無くなつた。土器を赤彩することは平安時代まで僅かながら継続するが、それは装飾というより、特別な意味を持った道具としての意味づけがあつたようと思われる。

赤彩顔料としては朱や丹、ベンガラ(弁柄、紅殻)などがあり、最も手に入りやすいのがベンガラである。ベンガラは酸化第二鉄を主成分とし、この地域でも砂層中の褐鐵鉱を焼成し、粉末にしてとり出す事ができる。



古墳時代中期の赤彩環(鍛冶屋台遺跡)



古墳時代前期の赤彩壺(神山谷遺跡)



古墳時代中期の赤彩壺と坏・鉢(鍛冶屋台遺跡)



古墳時代後期の赤彩壺と坏・鉢 (鍛冶屋台遺跡)



赤彩鉢の内面



採取してきた褐鉄鉱



焼いた褐鉄鉱
これを粉碎、粉にして 精製する
と ベンガラができる。

ベンガラの製造法



古墳時代後期壺の内面赤彩
(鍛冶屋台遺跡)



古墳時代後期壺の外面赤彩
(鍛冶屋台遺跡)



古墳時代後期の赤彩壺(宮脇遺跡)



古墳時代後期の赤彩高杯 (鍛冶屋台遺跡)



奈良時代の赤彩盤（芝崎遺跡）



奈良時代末から平安時代初期の赤彩壺（芝崎遺跡）

（神山谷遺跡）



平安時代初期の赤彩壺（鍛冶屋台遺跡）

（芝崎遺跡）



赤土と白土を混ぜて縞状
の胎土にした縞胎土器

須恵器の裏の中に、表面が赤褐色（小豆色）をしたものがあり、裏面を見ると塗り分け痕が見られるところから、焼成時の自然ではなく人為的に塗ったものであることが分かる。これは鉄分の多い釉薬を使った所謂鬼板釉と思われ、中世の擂鉢に施されたものと同様であろう。すでに平安時代の東海系で使われていたと考えられる。



表 鬼板釉須恵器 (城山遺跡) 裏



表 鬼板釉須恵器 (芝崎遺跡) 裏

② 赤と黒の器

古墳時代後期になると、外面は赤彩するが、内面は黒くした坏が出現する。土器を黒くする技術も縄文時代に確立され、弥生・古墳時代には一時的に廃れるが、古墳時代後期になるとまた盛んに黒色処理をするようになる、土器を黒くするのは、土器を焼成した熱いうちに、黒くする箇所に有機物（木葉・葉・初穀等）を押し当てるこことによって、気化したタールが蒸着して黒くなる。このタールが器の水漏れを防ぐことを狙って、考え出された技術であろう。この技術は後の瓦質土器、消し壺に引き継がれる。



古墳時代後期の外赤彩内黒高杯(瓜ヶ作遺跡)



古墳時代後期の内黒坏(宮脇遺跡)

③ 黒い器

古墳時代後期の黒色処理した坏の中に、真黒ではなく焦げ茶色で、表面を良く磨いて滑らかな一群がある。手触りの風合が木製品のようで、多分木器に似せて作ったものと思われる。



古墳時代前期の坩(神山谷遺跡)



古墳時代後期の内面黒甕(宮脇遺跡)



古墳時代後期の焦げ茶坏(宮ノ前遺跡)



古墳時代後期の焦げ茶坏(瓜ヶ作遺跡)



奈良時代の内面黒色坏(芝崎遺跡)



平安時代の内面黒色坏(芝崎遺跡ほか)



平安時代の内外面黒色坏(芝崎遺跡ほか)

平安時代中期（10世紀後半）頃になると、土師器壺は体部が丸みを有した碗形に変化する。これはこの頃畿内で攝津北東部の楠葉で碗形の瓦器生産が開始され、それが伝播してきたものと思われる。この楠葉瓦器は全体黒色の台付碗が主で、平安から近世にかけて京の公家で伝統的に使われたという。



平安時代後期の土師器碗(芝崎遺跡ほか)

土師器皿は、台付きで輪轂引きであるが表面を良く磨き、黒くしたものが多く、ほとんどが精製された作りになっている。



平安時代の土師器皿(芝崎遺跡ほか)

縄文時代から漆塗りの土器があり、古代では壺を漆容器に使った例もあるが、漆を塗った痕跡を有する例はあまりない。これはタール状のものが付着している事も考えられるが、灯芯痕とも異なるので、注目したい。



奈良時代の漆塗りと思われる壺
(芝崎遺跡)

④ 青い器

青色と云っても少し黒灰色の強い須恵器で、いずれも胎土は密で、焼成も良く焼き締まった壺や壺など、小型の器が多い。青黒灰色になるのは、鉄分の多い土を素材とし、高い温度に上げて還元炎焼成している為であろう。中には灰が被って自然釉が付いている器もある。古墳時代では中期に半島から須恵器焼成技術が伝わり、はじめ泉南の陶邑で窯が築かれ、平安時代には千葉県内を含め各地で生産された。



古墳時代中期の壺（寺方古墳群）



古墳時代中期の蓋（宮ノ前遺跡）



古墳時代中期の壺(寺方古墳群)



古墳時代中期の蓋(神山谷遺跡)



平安時代の蓋



平安時代の壺（芝崎遺跡）

⑤ 緑色の器

緑色の器（陶器）には、綠釉陶器と灰釉陶器があり、奈良時代から平安時代にかけて国内で焼かれた。彩釉陶器は中国の青磁や唐三彩の技術が奈良時代に入り、はじめ畿内で作られ、平安時代になって綠釉陶器や灰釉陶器が東海地域で生産され、全国に広まった。

綠釉陶器は、低火度で解ける鉛・銅を主成分とした釉をかけて焼成され、銅の発色が鮮やかであるが、低火度であるため焼き締まりが弱く、灰釉陶器より軟質である。生産地は主に京都洛北・洛西窯、愛知猿投窯で、官衙・寺院に供給された。

灰釉陶器は、高温で焼いた須恵器に自然釉がかかって美麗になる事にヒントを得て、薫灰を意識的にかけて焼成したもので、綠釉陶器より高温で焼く為、焼き締まる。灰釉が僅かに綠色なのは、釉に微量の鉄分を含んでいる為である。生産地は主に愛知の猿投窯から、周辺の尾北・二川・東濃などに広がり、やがて中世瀬戸窯の元となった。



綠釉陶器の碗（芝崎遺跡）



灰釉陶器の皿(神山谷遺跡)



灰釉陶器の皿・蓋・碗(中島遺跡ほか)

中島遺跡からは綠釉陶器が、破片ではあるが50点近く出土した。ほとんどは碗・皿であるが、1点手付き瓶の把手部分があり、この一群の質・量は県内では上総国府推定地の一つ稻荷台遺跡に次ぐものである。また、芝崎遺跡では掘立柱建物跡群の中から碗と瓶破片が出土していて、両遺跡の遺構の機能・立場を推定する上で、重要な参考となろう。



(表) 中島・芝崎遺跡出土の綠釉陶器

(裏)



神山谷遺跡



新台遺跡



参考 緑釉陶器の手付き瓶
(東京国立博物館蔵)

平安時代の灰釉陶器の長頸瓶

⑥ 白い器

土師器でも比較的色白のものがあって、鉄分の少ない土を選ぶか、土を晒して鉄分を少なくした粘土で作ったのかもしれない。また、芝崎遺跡ではほとんど石灰（海綿骨芯）からなる層が検出され、奈良から平安時代に採掘して、畑土や窯構築土、柱の根固めに使った跡が確認され、白色土器の材料として使った可能性も考えられる。



奈良時代の白い壊（芝崎遺跡）



平安時代の白い壊（芝崎遺跡）



平安時代の白い壊（篠本城山遺跡）



芝崎遺跡検出の白色海綿骨針土



奈良時代の白い須恵器蓋・环
(神山谷遺跡)

白い須恵器は、手触りが粉っぽく軟質であるところから、主に県内の生産地で作られたと思われる。



奈良・平安時代の須恵器坏 (芝崎遺跡)



平安時代の白い須恵器坏 (神山谷遺跡)

灰白色の土器はほとんどが須恵器で、硬く質のいいものは東海の湖西窯が主な産地としてあげられる。須恵器の中には軟質で密度が低いものがあり、このような須恵器は関東あるいは千葉県内で称されたものと思われる。しかし、色彩的には白いものが多く、鉄分の少ない土を選んで素材にしたのであろう。



古墳時代後期 湖西窯の
フラスコ形長頸瓶
(神山谷遺跡)



古墳時代後期
在地製の長頸瓶
(城山遺跡)



古墳時代後期
湖西窯製蓋・小壺
(神山谷遺跡)



奈良時代在地製の須恵器甕(城山遺跡)



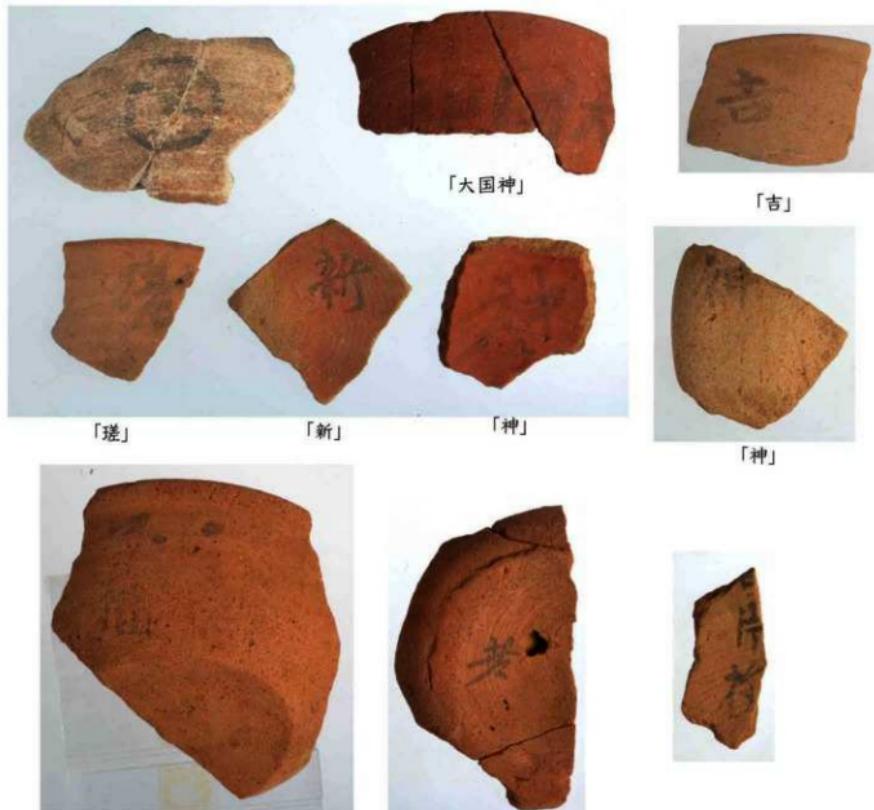
芝崎遺跡の白色海綿骨針層
検出状況

3. 器に書かれた文字・記号

古代の土器には、文様が描かれなくなった代わりに、線刻や墨で絵や文字が描かれるようになった。縄文土器や弥生土器には時々線刻画が書かれた例はあるが、古代（古墳時代以降）になると、絵だけでなく文字や記号が書かれた土器が多くなる。町内でも奈良時代以降には、文字や記号が書かれた土器が多く出土している。

① 墨書き土器

奈良時代から平安時代の主に土師器壊に、墨書きの文字が書かれた例が多くなる。多くは1字書きで何を意味しているか不明であるが、中には2字書き、3字書きもあり、それらの中には地名（郷名）と思われるもの、人名と思われるものの、寺名や神社名と思われるもののほか、同じ字を連続して書いた練習と思われるものもある。また、文字ではなく記号と思われる墨書きもあり、それらが必ずしも同じ目的で書かれたとは思えないところに、墨書きの意味が解けない謎を含んでいる。



神山谷遺跡出土の墨書き土器



「」



外「田」



「華」



内「田」



「新」



「益」

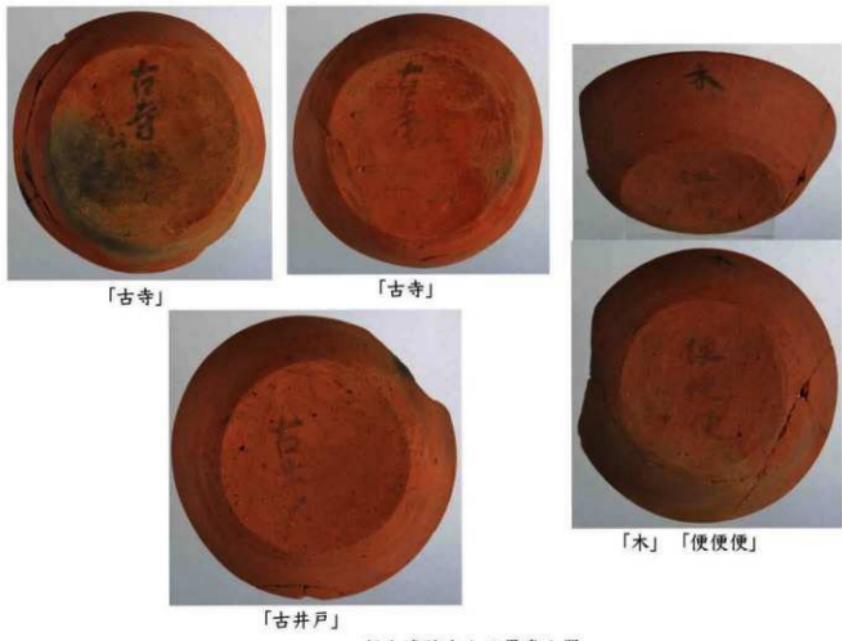


「又」

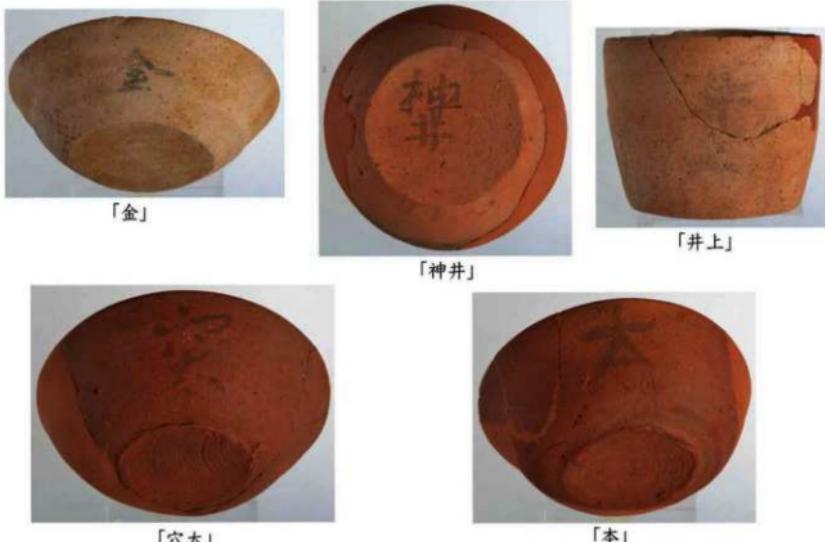


「」

神山谷遺跡出土の墨書き土器



新台遺跡出土の墨書土器



神山谷遺跡出土の墨書土器



「赤弥田寺」



「井力」



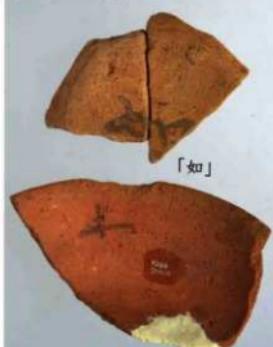
「O」



「泉」



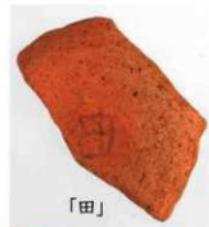
「又」



「如」



「粟」



「田」



「土」



「天」



「O」

城山遺跡出土の墨書土器



「副中」



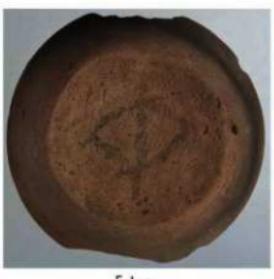
「満」



「」



「中」



「中」



「中」



「千万」



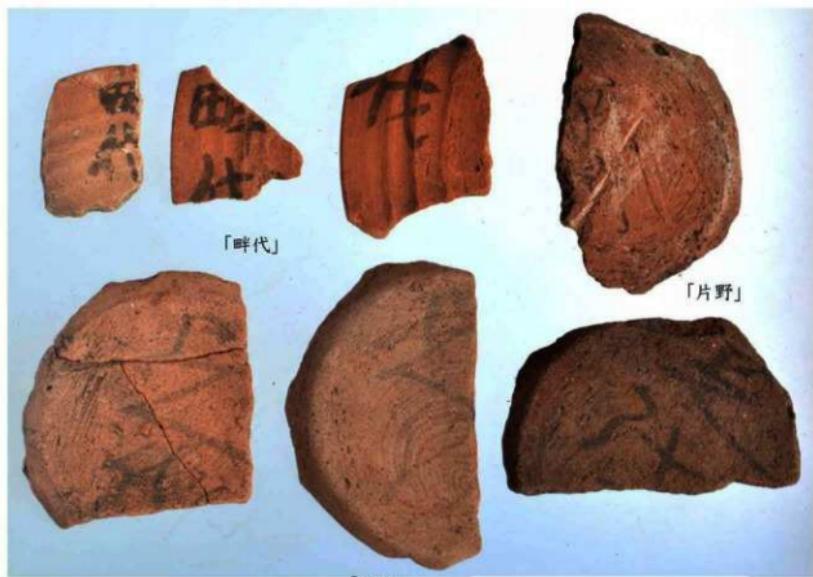
「山太」



「家」

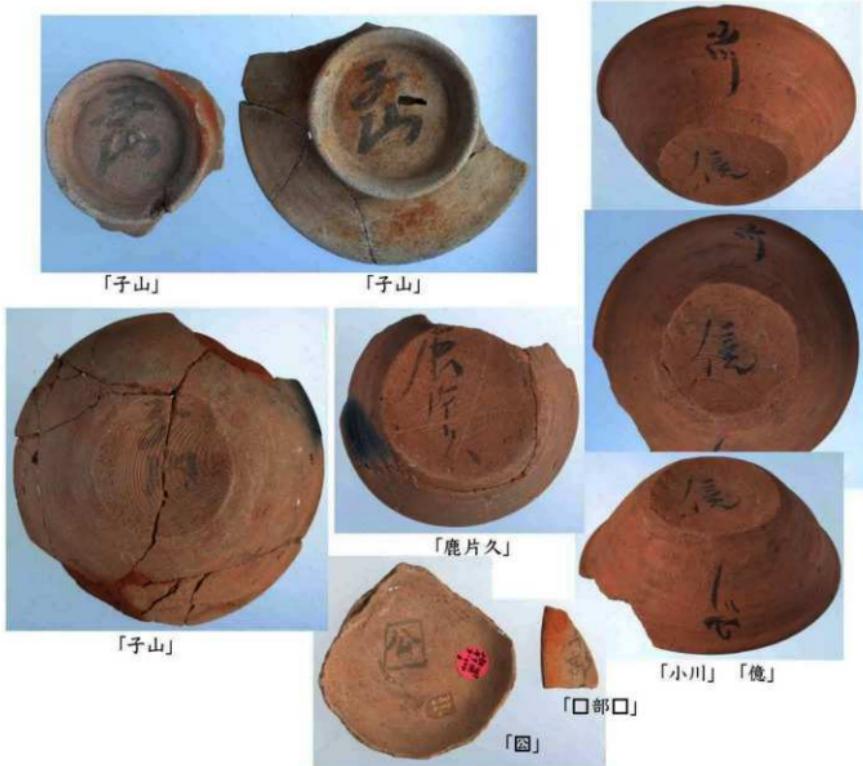


芝崎遺跡出土の墨書き土器



中島遺跡出土の墨書土器





中島遺跡出土の墨書き土器



宮ノ前遺跡出土の墨書き土器

② 線刻のある土器

土器には籠か鉄釘のような道具で線引きして、文字や記号などを書いた土器がある。特に町内では芝崎遺跡で様々な記号などを入れた土器が多く出土していて、中には網目状に入れた線刻があり、何らかの占いか呪いに使ったと考えられる。線刻の多くは焼成後に鉄釘状の工具で細い線を引いているが、中には焼成前に籠で書いた文字資料もある。



線刻のある土器（特記以外芝崎遺跡）



外面对称に「十」



線刻文様か

内面線刻



内面对称線刻「卅」



外面对称線刻「丂」



内面对称線刻「卅」



内面線刻「卅」

線刻のある土器（芝崎遺跡）

4. その他



須恵器甕片利用の硯



須恵器盤利用の硯



須恵器甕片利用の硯、4片接合
須恵器を利用した硯(転用硯) (芝崎遺跡)

① 硯

奈良・平安時代の遺跡からは墨書き土器が多く出土しているが、円面硯の様な定型的な硯はほとんど出土しない。その代わり硬い須恵器の破片を利用した転用硯があり、墨を摺った部分がツルツルになっている。また、世須恵器片の転用硯を、猿面權として珍重された。



格子叩き目の土器



格子叩き目の土器

② 叩き目

須恵器の甕には表面に整形の為の板目叩き目が通常あるが、中には在地生産須恵器や焼成須恵器、土師器の一部には変形の叩き目が施されているものがある。これらは地域の自由な発想で作られたものか、あまり類例がないので解明は進んでいない。



格子叩き目のある焼成須恵器鉢

変形たたき目のある器 (芝崎遺跡)



台付き壺（芝崎遺跡）



台付き壺（新台遺跡）



手捏ね土器（城山遺跡）

③ へんな形の器

奈良時代後半期に変な形の器がある。手捏ねで成形し、本体に対して大きな台をついた环形土器で、中島遺跡と新台遺跡などで似たものが出土している。何か特別な用途があったと思われる。

古墳時代の遺跡からは、たまに作り方が粗雑な小型の土器が出る。これを手捏ね土器と言って、祭祀に使われたものと理解されている。

④ 灯芯痕のある器

奈良時代から平安時代の壺には、たびたび口縁に黒いタール状のものが、縱に伸びるようについているものがある。これは灯明具の灯芯痕と思われるが、ある特定の遺構から集中して出る傾向がある。



灯芯痕のある壺（芝崎遺跡）



灯芯痕のある壺（新台遺跡）

おわりに

古代（古墳時代から平安時代）の器（土器—土師器・須恵器・陶器）などには、ほとんど文様はなくなり、実用一辯倒となったように思われてきた。しかし、この時代の器をよく見ると、形の変化はもちろんあるが、色彩や仕上げ方が様々である事が分かる。毎年、多くの遺跡発掘調査報告書が刊行されるが、それに載る器の写真はモノクロがほとんどで、色彩についての情報は伝わらない事が多かった。しかし、この色彩こそが形だけでは語れないもう一つの大好きな情報をはらんでいる事が、器を色彩からの観点で見ると分かってきた。ここでは本のさわりに過ぎないが、これを機会に古代の器を見直して行ければと思う。

本図録の執筆、編集は横芝光町教育委員会社会文化課町民ギャラリー担当道澤明があたった。内容についての文責は道澤に帰す。

参考文献

- 村山好文他（1985）長倉宮脇 横芝町教育委員会
道澤 明（1990）東・北長山野遺跡 北長山野遺跡調査会
奥住 淳（1995）横芝町石作台遺跡（財）山武郡市文化財センター年報No10
財団法人山武郡市文化財センター
河名 勉他（1996）千葉県の歴史 資料編 古代 千葉県史料研究財団
須田 勉他（1998）千葉県の歴史 資料編 考古3 千葉県史料研究財団
道澤 明（2000）篠本城跡・城山遺跡 財団法人東総文化財センター
平山誠一（2000）中台大木戸遺跡 財団法人山武郡市文化財センター
平川 南他（2001）千葉県の歴史 通史編 古代2 千葉県史料研究財団
岸本雅人、宮内勝巳、本多昭宏（2002）神山谷遺跡(1) 財団法人東総
文化財センター
本多昭宏（2002）神山谷遺跡(2) 財団法人東総文化財センター
本多昭宏、宮内勝巳（2002）新台遺跡 財団法人東総文化財センター
道澤 明（2005）芝崎遺跡I 財団法人東総文化財センター
稻見英輔・吉田直哉（2005）古川新田低地遺跡 財団法人山武郡市文化財
センター
島立桂、石渡典子（2007）長倉宮ノ前遺跡 財団法人山武郡市文化財センター
島立桂、田中万里子（2007）長倉鍛冶屋台遺跡 財団法人山武郡市文化財センター

平成30年度横芝光町民ギャラリー企画展図録

「横芝光町出土 古代の器いろ色」

発行日 平成30年10月6日
編集・発行 横芝光町教育委員会
印刷 三陽メディア株式会社

